

松平先生について書くように、との日本西洋古典学会のご依頼でしたが、その業績（論文、翻訳、講演、学会活動）の素晴らしさを基にして書くのはなかなか難しく、また先生の立派さは、衆目の見るところであり、私が書けば、いたずらにそれを誇張しているように取られますので、学生時代或はその後の平素の先生との交流から、私が先生から受けました知識と人間的影響を書かせて頂くことにします。

私は、1945年第二次世界大戦が終わった後は、世の中が英語へ英語へと英語英文一辺倒の世の中になって行くのに腹立たしく思い、ドイツ語を習得しようと決意し、後に独文を専攻しましたが、独文専攻生が意外に多いのに驚きました。そこで独文を諦め、専攻学生の少ない西洋古典文学を専攻することにしました。しかし、西洋古典文学主任の松平先生から、独文の単位を取得し終えて、大学院から西洋古典文学に入るようにとの助言を頂き、先ず独文に籍を置きました。そして独文の単位を取りながら、ギリシア語ラテン語を学んで行きました。

1951年5月初旬、当時私は、宝塚に近い中山寺駅付近に住んでいましたので、松平先生の8時から始まる週1回の演習「ヘシオドス『仕事と日』」に出席するため、5時始発の電車に乗って京都に通っていました。当時は、阪急京都線の終点は四条大宮で、其処からまた市電で百万遍まで乗って行かねばなりません。

やっと8時に演習室に着きますと、既に先生は演習室に来ておられ、私の顔を見るなり、さあ始めようかと、先生一人学生一人という1対1の演習を始められました。私は未だ1回生で初級文法を習いながら、この難解な作品に手を付けるような大胆なことをしたのです。他の先生なら、そんなことが出来る訳が無い、先ず文法、小文章の訳読を練習してから、演習を受けるようにと指導しておられたでしょう。

だが、松平先生は、私が朝5時始発の電車で来る状況を変えようとされず、文法は自分で出来るだけ速くマスターして8時からの演習に集中するように、と指示されました。一瞬不可能なことだと思い、先生のお顔を見たのですが、先生はやれば出来るさ、と仰って、演習室を出て行かれました。その後、私は夜も寝ず、必死になってギリシア語文法を覚えました。10時に演習が終了すると、学期初めの週では、ご自分の学習経験を述べてくださいました。まず、本文には訳を書き込まないで、単語帳に書くこと。一回訳してスムーズに訳せなければ、何度も、特に訳し難いところは、繰り返し訳すこと等細かく注意され、先生が学生時代にご使用になられたランゲンシャイトのポケット辞典をくださいました。

それが済みますと、当時日本西洋古典学会設立準備委員の役職についておられました先生は、委員長および常任委員と委員の数を哲・史・文の分野別に何名にするか、学会は年何回にするか等の試案を考えておられ、非常にお忙しい日々をお過ごしでした。学会規約は、学会誌『西洋古典学研究 I』の最終頁に記載されている内容になりました。勿論その内容の一部は、時代に応じて変化しています。例えば、委員の任期が1年長くなったとか学会費が値上げされたことなどが挙げられます。そしてこの試案が設立準備委員会に諮られ、承認され、引き続き学会委員会において承認され、さらに日本西洋古典学会第一回大会においてこの規約どおりに委員長、常任委員、委員、顧問が選ばれま

した。

以上のように松平先生から受けました第一印象および演習やその他の教育におけるご活動を述べましたのは、他の多人数の聴講生がいる講義では、殆ど講義の内容に気を取られ、講義される先生自体への観察が疎かになるのは自然なことだからです。

こうしてドイツ文学と古典文学を平行して学びながらも、学部を卒業し、古典文学の大学院に入りました。だが、私が受けました松平先生の演習は、先輩に天理の芹沢茂さん、筑摩書房元社長の井上達三さん、既にお亡くなりになりました京都府立大の中村善也先生たちがお受けになられましたが、当時はもう一人もおられず、私一人だけでした。同期に国原吉之助君がいましたが、彼はラテン文学を中心に研究していましたので、私の登録していました演習で顔を合わすことはありませんでした。

このような状況で古典の勉学を続けています時、同志社大学でドイツ語の教鞭を取るように、と独文主任の大山定一先生と松平先生からの推薦を受けまして、同志社大学に勤務することになりました。古典文学の研究を継続することは勿論、助手の居なかった京大古典学教室の事務を扱うことも、許されるということでありました。ところが、同志社に勤務している時に、突然ドイツのマインツ大学に西洋古典文学の研究留学をすることになりました。

1959年4月から1960年9月までの1年5ヶ月間、ホメロスの研究で著名なマインツ大学西洋古典学教室主任教授 **Walter Marg** 先生の許で『イリアス』の研究をさせて頂きました。松平先生は、**Marg** 先生とは未知の間柄でしたのに、前以て自分の弟子の松本の経歴、業績を説明してくださっていましたので、初対面の **Marg** 先生にも私の幼稚なドイツ語でも何とか私の研究意図、京大研究室、日本西洋古典学の状況、私の家族、京都市等の説明が出来ました。松平先生の温かい心遣いのお陰です。

マインツ大学では、当初とにかくアジアの東の果てにある日本の大学において西洋古典学が学ばれていたことに西洋古典学の学生たちは驚き、その日本の京都から来た私を珍しそうに眺めていました。そうこうするうちに、私もマインツの学生と一緒にマルク先生や、ラテン語で授業をされるので有名なティアフェルダー先生その他の先生の講義や演習を聴講し学期を過ごしていきました。

以上のようにして過ごした最初の夏学期は比較的長く感じましたが、後に続く冬学期と夏学期は瞬く間に過ぎてしまい、私は帰国することになりました。そして私の後に岡道男さんがマインツの留学生となり、その後に松平先生が客員教授としてマインツ大学に滞在されたのでありました。こうして京大西洋古典学教室とマインツの西洋古典学教室は緊密な関係を持つようになったのです。この関係の一環として京大に来られたのがアンドレアス・シュピラさんです。

この他、当時既に日本西洋古典学会事務局の責任者でありました松平先生は、ベルファーストに留学しておられた時にも、日本西洋古典学会の代表として、パリで開催されました国際西洋古典学会に参加しておられます。マインツ時代以後でも、デルポイで開催されましたシムポジウムでも日本の代表として、日本の学者が西洋古典学を学ぶ意義を強調されたのであります。そしてこのような発信により、ヨーロッパのみならず他の地域の古典学者にも日本西洋古典学会のギリシア・ラテンにたいする深い研究が大きな感動を与えたのでした。これは、偏にギリシア・ラテンのみならず、近代ヨーロッパ

文学、さらには日本の古典文学にも深い造詣をお持ちになり、日本西洋古典学会を設立され、育て上げられた松平先生にして初めてなしうることでした。私は先生の弟子であることを誇りに思いますし、先生の名誉を傷つけないよう細心の注意を払っていく積りです。

松本仁助（大阪大学名誉教授）

付録：松平千秋先生著作目録

I 著書

- 1950年4月 『ギリシア語文法』 創元社（田中美知太郎と共著）
1951年9月 『ギリシア語入門』 岩波書店（田中美知太郎と共著）
1968年4月 『新ラテン文法』 南江堂（国原吉之助と共著。1994年5月、東洋出版）
1968年5月 『ギリシア語文法』 岩波書店（田中美知太郎と共著）
1985年9月 『ホメロスとヘロドトス』 筑摩書房

II 論文

- 1949年1月 「若き日のアリストパネース —ダイタレース—」 創元社「西洋古典論集」
1953年7月 「ΗΣΙΟΔΕΙΟΣ ΧΑΡΑΚΤΗΡ」 「西洋古典学研究」 1
1956年11月 「叙事詩『キュプリア』考」 「京都大学文学部五十周年記念論文集」
1957年10月 「イソップ伝について」 天理図書館「ビブリア」 9
1962年2月 「『イーリアス』第二歌の研究」 京都大学学位請求論文
1962年3月 「アガ멤ノーンの「試み」 —B72-5」 「西洋古典学研究」 10
1966年6月 「語り物としてのホメーロス」 日本文体論協会「文体論研究」 8
1968年3月 「ヘロドトスにおけるクセルクセス像」 「西洋古典学研究」 16
1968年6月 「アトッサの夢 —ヘレネス対バルバロイ」 「西南アジア研究」 20
1981年 ‘Xerxes, der Sohn des Dareios’ “Gnomosyne. Festschrift für Walter Marg zum 70. Geburtstag” C. H. Beck
1982年3月 「古代ギリシア及びローマにおける女性の言語についての覚書」 「京都産業大学国際言語科学研究所所報」 3-2

III 翻訳

- 1948年6月 クセノポン 『エペソス物語 ハプロコメースとアンテイアの恋』 大翠書院（河出書房世界文学全集古典篇 16、1956。筑摩書房世界文学大系 64「古代文学集」 1961）
1952年2月 エウリーピデース 『ヒッポリュトス』 河出書房世界文学全集古典篇 1（岩波文庫 1959。人文書院 1960。筑摩書房 1965）

- 1959年6月 エウリピデス『トロイアの女』筑摩書房世界文学大系2「ギリシア・ローマ古典劇集」(人文書院1960。筑摩書房1965)
- 1959年6月 エウリピデス『バックスの信女』筑摩書房世界文学大系2「ギリシア・ローマ古典劇集」(人文書院1960。筑摩書房1965。集英社世界文学全集1、1974。集英社ギャラリー世界の文学、1990)
- 1959年6月 ギルバート・マリー「古典劇の伝統」筑摩書房世界文学大系2「ギリシア・ローマ古典劇集」
- 1960年3月 ソポクレス『エレクトラ』人文書院ギリシア悲劇全集2(新潮社「ギリシア劇集」1963。筑摩書房1964)
- 1960年7月 カリマコス『讃歌(抄)』平凡社世界名詩集大成1(「アルテミス頌」「パラスの浴み」)
- 1961年9月 アリストパネス『騎士』人文書院ギリシア喜劇全集1(新潮社1963。筑摩書房1964)
- 1965年1月 エウリピデス『アンドロマケ』筑摩書房世界古典文学全集9
- 1967年7月 ヘロドトス『歴史』筑摩書房世界古典文学全集10(中央公論社「世界の名著」1970(抄録)。岩波文庫1971、1972)
- 1978年5月 ソポクレス『アンティゴネ』講談社世界文学全集2
- 1978年5月 プラウトゥス『綱曳き』講談社世界文学全集2
- 1982年6月 ホメロス『オデュッセイア』講談社世界文学全集1
- 1985年3月 クセノポン『アナバシス』筑摩書房(岩波文庫1993)
- 1986年5月 ヘーシオドス『仕事と日』岩波文庫
- 1987年3月 ロンゴス『ダフニスとクロエー』岩波文庫(松平千秋訳、シャガール絵、ロンゴス『ダフニスとクロエー』(特装版、普及版)岩波書店2005)
- 1989年1月 アイリアノス『ギリシア奇談集』岩波文庫(中務哲郎と共訳)
- 1990年5月 エウリーピデース『アルケースティス』岩波書店ギリシア悲劇全集5
- 1991年3月 エウリーピデース『イオン』岩波書店ギリシア悲劇全集7
- 1992年9月 ホメロス『イリアス(上下)』岩波文庫
- 1994年9月 ホメロス『オデュッセイア(上下)』(改訳)岩波文庫

IV エッセイ・その他

- 1956年4月 「英国聯合古典学会に出席して」「西洋古典学研究」4
- 1957年2月 「神話の運命」「架橋」2
- 1960年1~7月 「ギリシア悲劇の周辺1~4」人文書院「ギリシア悲劇全集」1~4
月報
- 1961年2月 「ギリシア小説の読者へ」筑摩書房世界文学大系64「古代文学集」
月報
- 1961年3月 「F. I. E. C. だより」「西洋古典学研究」9
- 1962年 ‘Classical Studies in Japan’ ブラジル古典学会 ‘Romanitas’
4-5
- 1964年3月 「F. I. E. C. だより」「西洋古典学研究」12

- 1967年3月 ‘Homer und Wakarpa’ 学術会議文科系学会連合 ‘Japanese Science Review-Humanistic Studies-’ 20
- 1968年3月 「マラトンとサラミスの戦い」高津春繁他『古代ギリシア』（世界歴史シリーズ2）世界文化社
- 1970年11月 「トロイア戦争雑感」岩波講座「世界歴史」18月報
- 1971年 ‘Japanese Attitude towards the Classics’ ギリシア人文学協会「デルフィ国際シンポジウム報告」2
- 1972年10月 「レオニダスとその妻」中央公論社「歴史と人物」
- 1973年6月 「神々のことば」角川書店「プラトン全集」1月報
- 1974年10月 「プラトンの詩」岩波書店「プラトン全集」5月報
- 1975年3月 「田中秀央博士の逝去を悼む」「西洋古典学研究」23
- 1975年3月 「第6回国際古典学会議について」「西洋古典学研究」23
- 1979年10月 「回顧」京大以文会「以文」22（京都大学文学部編『以文会友 京都大学文学部今昔』京都大学学術出版会 2005）
- 1981年12月 「『オデュッセイア』を訳しながら」「ももんが」25-12
- 1983年11月 「第一教室と松蟬」「京大広報」262
- 1986年3月 「西洋古典の翻訳」読売新聞夕刊（3月7日）
- 1968年3月 「弔辞（田中美知太郎先生）」「西洋古典学研究」34
- 1986年3月 「西洋古典学と私」「京都産業大学国際言語科学研究所所報」7-2
- 1986年8月 「田中秀央先生と日本の西洋古典学」「古代文化」38-8
- 1988年4月 「関本至著『現代ギリシアの言語と文学』をめぐって」「ももんが」32-4
- 1994年5月 「思い出すままに」刊行委員会編『追悼 関本至』溪水社
- 1996年12月 「二つの『トロイア戦記』」中央大学「中央評論」218（48-4）
- 1993年5月 「我儘な読書」岩波文庫編集部編『読書のすすめ 第二集』（岩波文庫『読書のすすめ』1997）
- 1999年4月 「ティッサペルネスのことなど」京都大学学術出版会西洋古典叢書、根本英世訳、クセノポン『ギリシア史2』月報

V 書評

- 1957年3月 呉茂一『ぎりしあへの詩人たち』筑摩書房 1956。高津春繁『ギリシアの詩』岩波新書 1956。「西洋古典学研究」5
- 1957年3月 M. Bowra, Homer and his Forerunners. Edinburgh 1955. 「西洋古典学研究」5
- 1958年5月 A. Lesky, Geschichte der griechischen Literatur. Lfgg. 1-5. Francke Verlag 1957-8. 「西洋古典学研究」6
- 1958年5月 A. Pertusi, Scholia Vetera in Hesiodi Opera et Dies. Milano 1955. R. Merkelbach, Die Hesiodfragmente auf Papyrus. Leipzig 1957. 「西洋古典学研究」6
- 1959年3月 F. Dornseiff, etc., Rückläufiges Wörterbuch der griechischen

- Eigennamen. Akademie Verlag 1957. 「西洋古典学研究」 7
- 1961年3月 A. A. M. van der Heyden, H. H. Scullard, edd., Atlas of the Classical World. Thomas Nelson and Sons Ltd. 1959. 「西洋古典学研究」 9
- 1963年3月 J. Eberle, Viva Camena, Latina huius aetatis carmina. Artemis Verlag 1961.
idem, Amores, Nova Carmina. Artemis Verlag 1961. 「西洋古典学研究」 11
- 1966年3月 E. L. Bennett Jr., ed., Mycenaean Studies. The University of Wisconsin Press 1964. 「西洋古典学研究」 14
- 1969年3月 K. I. Βουρβέρης, ΕΙΣΑΓΩΓΗ ΕΙΣ ΤΗΝ ΑΡΧΑΙΟΓΝΩΣΙΑΝ ΚΑΙ ΤΗΝ ΚΛΑΣΣΙΚΗΝ ΦΙΛΟΛΟΓΙΑΝ. Athenai 1967. 「西洋古典学研究」 17
- 1969年3月 E. Norden, Kleine Schriften zum klassischen Altertum, hrsg. von B. Kytzler. Walter de Gruyter 1966. 「西洋古典学研究」 17
- 1969年3月 関本至『現代ギリシア語文法』泉屋書店 1968。「西洋古典学研究」 17
- 1971年3月 R. H. Simpson, J. F. Lazenby, The Catalogue of the Ships in Homer' s Iliad. Oxford 1970. 「西洋古典学研究」 19
- 1976年3月 A. A. Parry, Blameless Aegisthus. A Study of ΑΜΥΜΩΝ and Other Homeric Epithets. Leiden 1973. 「西洋古典学研究」 24
- 1981年3月 W. Elliger, Die Darstellung der Landschaft in der griechischen Dichtung. Walter de Gruyter 1975. 「西洋古典学研究」 29

(出典：京都大学西洋古典研究会編『松平千秋先生追悼文集』2007年3月)